

卵子の抱える問題

日本産婦人科学会から報告されている、全国の不妊治療施設の集計によれば、2011年度1年間で約27万周期の治療が行われています。しかしながら、最終的にお母さんが抱っこできる赤ちゃんは約3万2000児で、実に全治療数の12%に過ぎません。高度医療を駆使したとしても成功率が低いということを知らなければなりません。これは医療の技術的な問題というよりは、受診される患者様の年齢が高まり、卵巣機能の低下により卵子の質が低下してきたことによると考えられます。この卵子の質を人為的な技術で改善する試み、例えば卵子細胞質のミトコンドリアや核を若い卵子のミトコンドリアや核と取り替えようとするものです。しかし、現在のところ未解決な点が多く臨床応用にはいたらず未だ研究段階という状況です。また、卵子が老化してしまう前、つまり年齢が若いうちに自身の卵子を凍結保存しておこうとの考えもあり、実際に一部では実施され始めています。しかし、保存した卵子が融解後に凍結していない卵子と同様に正常に受精可能なのか？受精後どの程度の着床率や分娩率があるのか？については、まだ十分なデータは集まっていません。今のところ卵子凍結は公的な機関では実施されておらず、長期間安全に保存できる保証もないのが現実です。仮に長期間保存に問題がなかったとしても、移植できる年齢の限界を決めるなどの解決しなければならない問題は多くあります。ただし、がんの患者様が治療後に自身の卵子（男性であれば精子）を将来のために残しておくことは賛成ですが、これについても解決すべき問題は同様に存在しています。

やはり、確実な手段は若いうちに結婚し育児を得ることにつきます。しかし、現実には若いうちに結婚したとしても仕事と両立できる社会環境ではありません。結婚して一時的に仕事を離れても、子育てをしながら社会復帰が叶えられる環境でなければなりません。日本も徐々にその方向に向っているとは思いますが十分ではありません。

女性が男性と同じ立場で社会活動することは素晴らしいことだと思いますが、女性自身が生涯プランを立てる際、女性の正しい生理学を学ぶ機会が学生時代になされなかったため、妊娠適齢時期の知識を欠いたまま人生設計を立てているケースがいかに多いかを知らされます。これからは生殖医療に関わっている我々が行政に働きかけ、学校での性教育の中に不妊を含めた正しい女性生理学を取り入れて頂くことが必要だと考えています。そして、このような教育は女性だけでなく、男女共に学ぶべきものだと思います。